



Chapter

1

『カーミラ』

Carmilla



カーミラ

『カーミラ』の重要性 — 『ドラキュラ』よりも早く 書かれたヴァンパイア小説

1814年、アイルランドのダブリンにて生を受けたジョーゼフ・トマス・シェリダン・レ・ファニユは、英国国教会の家庭で育ちます。フランス人であった父方の先祖が宗教的迫害を逃れ、17世紀末にアイルランドに渡ったという背景がありました。1832年にダブリンの大学トリニティ・カレッジで古典や法律を学びつつ（のちに弁護士資格も取得）、文芸やジャーナリズムを志すようになったレ・ファニユは卒業後に複数の新聞社で記事を書くようになります。本書で取り上げる『カーミラ』は、ロンドンで発行された月刊文芸誌「ザ・ダーク・ブルー」に4回にわたって連載されていました（1871–1872）。本作は後に、自選怪談集『鏡の中におぼろげに』（*In a Glass Darkly*, 1872）にも収められます。英国圏ヴァンパイア小説といえばドラキュラ伯爵と人類の死闘を描いたブラム・ストーカーの『ドラキュラ』（1897）が筆頭に挙げられるものの、それに対して『カーミラ』（1872）は25年も先駆けています。しかも女性の吸血鬼による接近と誘惑と襲撃を描くという点において極めて斬新な中編です。さらに歴史を遡れば類似するヴァンパイアジャンルの先行作品は複数あるものの、『カーミラ』は「同性愛的色彩が大変濃厚」（南條, 398）という点が独創的です。



シェリダン・レ・ファニユ（1814–1873）

『カーミラ』の語り の構造とあらすじ

『カーミラ』の語りは入れ子構造となっています。ヘッセリウス博士が文通相手から何年も前に受け取った文書（手紙）を語り手が読んでいくという



D・H・フリストンによる初出誌「ダーク・ブルー」の挿絵（1872年）

設定が前書きにて提示され、第1節以降は文書の執筆者（文通相手の女性）が少女時代を回顧して書く内容、というスタイルを取っています。

退役した軍人の父親と暮らす語り手の「私」ことローラは、オーストリアの古城で平穏に暮らしています。彼女は父の友人であるシュピールスドルフ将軍が娘を連れて訪れるのを楽しみにしていました。ところが数日後、将軍から手紙が届き、彼の娘が息を引き取ったと書かれているではありませんか。手紙は「あれは悪魔の仕業なのだ」、「ある怪物を追い詰め、退治する」と穏やかではない内容で、推察するに、将軍の娘は心を許した何者かに襲われたようです。数日後「私」の目の前で猛スピードの馬車が走り抜け、横転する事故が起こったのです。馬車に乗っていたのは謎めいた貴婦人と美しい少女。二人は命からがら生き延びたものの、貴婦人は詳細を語らないまま、その少女—カーミラ—を親娘に託して立ち去ります。物語は、「私」がその少女カーミラと共に過ごしていく日々を綴ります。やがて「私」の周囲で不穏な出来事が起こり始めます。領地の小作人の娘が幼くして原因不明の衰弱で亡くなり、時々領地を訪ねる香具師の連れている犬が「私」とカーミラに向かって吠えたてます。そして「私」もまた、原因不明の衰弱によって苦しむことになります。

21世紀になって『カーミラ』を読めば、驚くほどホラーの定石に満ち溢れていると気が付きます。「私」の預かり知らぬところで衰弱死する第一の被害者である少女、その原因であったであろう何者かに復讐を誓う

父親。親娘の元に居候することになる謎めいた美少女カーミラ。「私」の周りで起こる不審死、そして香具師の連れた犬がカーミラに向かって吠え出す場面。流石に読者にとっては、カーミラが正体を隠したヴァンパイアで、これまでの犠牲者と同じように「私」に吸血行為を繰り返していると察するでしょう。読者としてはカーミラという最大の脅威がそこにいるとわかっているのに「私」はその危険性に気がついていない、まさにお手本のようなドラマティック・アイロニーです。「ドラマティック・アイロニー（劇的皮肉）」とは、読者と劇中の登場人物の間に情報の差が生じるために仕掛けられるサスペンスのことです。本書では、カーミラが「私」とどのように接触しているのか、その際の心理と言葉遣いが豊かに表現されている箇所を集中して読んで参りましょう。

🌀 *Carmilla* (1872) - Vol.1

『カーミラ』の英語原文について

『カーミラ』の英語は平易だと言え、基礎的な文法知識と一定の語彙力、そして登場人物が巻き込まれる状況が把握できれば比較的サクサク読める英語です。ただし非日常的な出来事を回想という手記を通じて読んでいくという語りの設定が少しややこしい点に加え、異常な事態を読み取る必要があります。

あなたは私の中で甘美な死を迎える。: you shall die — die, sweetly die — into mine.

『カーミラ』の第4章「彼女の習慣—散策」(IV. Her Habits—A Saunter)を読みましょう。Her habits（彼女の習慣）の「彼女」はカーミラを指します。saunter (/ˈsɔːn.tər/) は「散策」です。動詞としても使える言葉で、He came sauntering down the road with his hands in his pockets. のように用います。さてこのVol.1では、語り手である「私」とカーミラの会話が交わされます。ヴァンパイアとしてのカーミラが「獲物」である語り手を巧みに誘惑する言動を楽しんでください。



原文テキスト

まずは一読してください。

She used to place her pretty arms about my neck, draw me to her, and laying her cheek to mine, murmur with her lips near my ear, “Dearest, your little heart is wounded; think me not cruel because I obey the irresistible law of my strength and weakness; if your dear heart is wounded, my wild heart bleeds with yours. In the rapture of my enormous humiliation, I live in your warm life, and you shall die—die, sweetly die—into mine. I cannot help it; as I draw near to you, you, in your turn, will draw near to others, and learn the rapture of that cruelty, which yet is love; so, for a while, seek to know no more of me and mine, but trust me with all your loving spirit.”

And when she had spoken such a rhapsody, she would press me more closely in her trembling embrace, and her lips in soft kisses gently glow upon my cheek.

怪談単語トレーニング

単語がわかりづかった場合はここで準備を。

単語	品詞	日本語	例文
murmur (ˈmɜ:mə(r))	動	囁く	I heard someone murmur right behind me, but no one was there. (すぐ背後で誰かが囁くのが聞こえたが、そこには誰もいなかった。)
wounded (ˈwu:ndɪd)	形	傷ついた	His cold words left her deeply wounded. (彼の冷たい言葉は彼女に深い傷を残した。)
obey (əˈbeɪ)	動	従う	I didn't want to obey the voice, but my body moved on its own. (その声に従いたくなかったのに、体が勝手に動いた。)
irresistible (ɪrɪˈzɪstəbl)	形	抵抗できない	The witches told him to give in to his irresistible desire. (魔女たちは彼に、自分の抗えない欲望に身を任せるよう告げた。)
rapture (ˈræptʃə(r))	名	狂喜	He found rapture in deceiving others. (彼は他人を欺くことに恍惚を覚えた。)
humiliation (hju:mɪˈliːʃən)	名	屈辱	The humiliation I suffered still burns inside me. (あの時の屈辱はいまだに胸の奥で燃え続けている。)
rhapsody (ˈræpsədi)	名	狂詩曲	His rhapsody drew people in, until they lost their minds. (彼の狂気じみた語りは人々を引き込み、やがて正気を失わせた。)
trembling (ˈtremblɪŋ)	形	震えた	Her trembling arms were covered in blood, but she kept smiling. (彼女の震える腕は血に塗れていたのに、彼女は微笑み続けていた。) ※tremble (動)「震える」
embrace (ɪmˈbreɪs)	名	抱擁	The monster's embrace almost choked the child. (怪物の抱擁は子供を窒息させるところだった。)
glow (ˈgləʊ)	動	光る	Eyes glowed in the dark, watching me. (暗闇の中で目が光り、私を見ていた。)

読解トレーニング

英語の語順通りに小分けにして読んでみよう。

- ① She used to place her pretty arms about my neck, / draw me to her, / and laying her cheek to mine, / **murmur** with her lips near my ear, /
- ② “Dearest, your little heart is **wounded**; / think me not cruel / because I **obey** the **irresistible** law of my strength and weakness; / if your dear heart is wounded, / my wild heart bleeds with yours. //
- ③ In the **rapture** of my enormous **humiliation** / I live in your warm life, / and you shall die—die, sweetly die—into mine. //
- ④ I cannot help it; as I draw near to you, you, in your turn, / will draw near to others, and learn the rapture of that cruelty, / which yet is love; so, for a while, / seek to know no more of me and mine, / but trust me with all your loving spirit.” //
- ⑤ And when she had spoken such a **rhapsody**, / she would press me more closely / in her **trembling embrace**, / and her lips in soft kisses / gently **glow upon** my cheek. //

英文の読解ガイド

① She used to place her pretty arms about my neck, / draw me to her, / and laying her cheek to mine, / **murmur** with her lips near my ear, /

カーミラから「私」への身体接触

カーミラはよく、愛らしい腕を私の首に回して引き寄せ (She used to place her pretty arms about my neck, draw me to her,)、頬を寄せ合いながら (and laying her cheek to mine,)、耳元で囁きかけてきたのです (murmur with her lips near my ear, ...).

愛らしい腕を私の首に回して：She used to place her pretty arms about my neck ...

used toに続く動作を読み解いていきましょう。カーミラの動作 (①) と呟いた言葉 (②) の順番通りに読みます。① 語り手 (ヘッセリウス博士が受け取った報告の執筆者) は、She (カーミラ) が「よく～したものです (used to V)」と記しています。used toと過去形になっているのは、この小説が語り手による過去の回想という体をとっているからです。昔、カーミラと過ごしていて起こった出来事を思い出して書いているというわけです。さてカーミラが語り手に対して何をやっていたのかといえば、**place** ... して、**draw** ... して、**laying** しながら、**murmur** していました。この構造が捉えられていれば問題ありません。

① She [Carmilla] **used to** ～ 「カーミラはよく～したものです。」

→ 「～」の中身は以下 (1) (2) (3)。used to の後にくる動詞は原形です。

(1) (used to) **place** her pretty arms about my neck,

「その愛らしい腕を私の首の周りに**回して**」

→ 彼女の愛らしい腕を (her pretty arms) 私の首の周りに (about my neck) place するという動作から、place を「～を回して」と解します。

(2) (used to) **draw** me to her,

「私を彼女のそばに**引き寄せて**」

→ draw A to B 「AをBに引き寄せる」

(3) (used to) **murmur** with her lips near my ear,

「耳元に唇を寄せてそっと**囁く**のです」

→ murmur 「囁く」 / with her lips 「彼女の唇から」 / near my ear 「私の耳元で」

→ カーミラが私の耳元で何をそっと囁いたのかは、この後に引用符“”の中で語られますので、これからゆっくり読んでいきましょう。

頬を寄せ合いながら：and laying her cheek to mine,

さてここで、(2) と (3) の間にある分詞構文 laying を読み取ります。両者の間には and laying her cheek to mine 「彼女の頬を私の頬に**くっつけて**」という語句があります。これは何でしょうか。used to の後には動詞の原形が来るところ、laying は ing が付いて現在分詞形ですから話が合いません。どう理解を整理して読めば良いのでしょうか。この laying は文法で言えば分詞構文に当たります。何かと同時に／加えて行っている動作を語り手が伝えたいときにはこの文法が役立ち、「～しながら」と読めます。つまり書き手は、(2) と (3) の間にこのような動作も加わっていたんだよ、と伝えたくて、この動作も「～して」と理解できます。整理しますと、laying は動作を追加しながら状況をより具体的に描いていて、

怪談

「ろくろ首 (ROKURO-KUBI)」

小泉八雲 / Lafcadio Hearn

小泉八雲の『怪談』(Kwaidan, 1904)を読みましょう。1850年、ラフカディオ・ハーンは、ギリシアに生まれます。父はアイルランド生まれのイギリス人、母はギリシア人という点からも、彼のハイブリッド性がうかがえます。やがて両親の不和をきっかけに裕福な大叔



小泉八雲 (1850 - 1904)

母に引き取られたハーンでしたが、そんな大叔母も投資で破産します。学費を払えなくなったハーンは1869年にアメリカへ渡り、職を転々としたのちに彼の人生に大きな影響を与える職、ジャーナリズムに関わるようになります。オハイオ州シンシナティの新聞社で犯罪、オカルティズム、幽霊などを巡る記事を書いて認められたハーンは、アメリカ南部はルイジアナ州ニューオーリンズに移り、副編集長をしつつクレオール文化に触れます。また、主にフランス語によって書かれた文物を翻訳する仕事にも着手します。こうしてみると、ジャーナリズム (取材力)、怪奇嗜好、文化横断的な意識がハーンの人生にとって大きな意味を持っていたことがうかがえます。

1884年、ニューオーリンズにて開催された万国博覧会にて日本の展示物をハーンが取材したことで東洋と接します。その後、1890年にニューヨーク雑誌社の特派員として初来日したハーンは横浜も大層気に入ったようで、そのまま日本に滞在を続けます。島根県尋常中学校で英語を教

える傍ら、1891年、ハーン41歳のとき、小泉セツとの人生を歩み始めることになるのです。

熊本の第五高等学校での勤務ののち、ハーンは東京帝国大学で英文学を教えるようになります。ちなみに退職する際、ハーンの後任を務めたのが夏目漱石。人気を博していたハーンの後任ということで、漱石は大変なプレッシャーを抱えていたようです。大学を去ったのち文筆業を続けていたハーンが54歳となった1904年、本書で取り上げる『怪談』が出版されます (そして同年、狭心症のため急逝)。本書でハーンは日本の怪談を英語で語り直します。ハーンが日本の怪談を記録し語り直したことで、それが伝播し、今や現代日本人にとって一つや二つは耳にしたことがあるほど定着するようになったのです。けだし偉大な仕事という他ありません。そしてハーンの語り直しを介して実に様々な怪談が次の世代へとまた語り直され、翻案され、ポップカルチャーへと変容、進化している中に我々も生きているのだと思わされます。

怪談「ろくろ首」の主人公

本作の主人公は、元は腕に覚えのある侍、磯貝平太座右衛門武連 (いそがいへいだござえもんたけつら) で、今は名を変え僧侶となった男、回竜 (かいりょう) です。妖怪「ろくろ首」自体のインパクトが強いせいか、この主人公がどれほど一般に覚えられているかはやや疑問ですが、実は本作は、このキャラクターの面白さで読者をグイグイと引っ張っていく物語でもあります。かつて侍だった僧侶という設定だけでも十分に面白いのですが、この回竜、猛々しい侍の血族で、武芸の才に恵まれた荒武者として名を轟かせていました。しかし主君の滅亡に際し、それでも忠を尽くす心から他の大名に仕えることをよしとせず、また出世欲もなかったために僧となり旅をするようになりました。かように「主人公属性」の大変に強いキャラクターである回竜です。怪談「ろくろ首」は、上記のような回竜の経歴が語られ、甲斐の国を訪れるところから始まりま

す。回竜が人里離れた寂しい土地での夜、星空を眺めながら野宿をして

いると、通りかかった一人の木こりが彼を気かけ、親切にも自分の住まいである小屋を一夜の宿として提供してくれるというのです。木こりの親切心を好ましく思った回竜が彼と連れ立って小屋に入ったところ、そこには四人の男女が暮らしておりました。彼らの上品な言葉遣いにも静かに感心しつつ、回竜は寝床につきます。しかし、ふと目を覚まして喉の渴きを癒そうと部屋を出たところ、主人を含めた五人の男女が眠っている大部屋の中が目に入りました。回竜は異変に気がつきます。そこに寝ている五人全員の首がなく、ただ胴体が横たわっているのみだったのです。暴力的な犯罪の可能性も考えましたが、どうもそうではなく、自分はまんまと妖怪ろくろ首の棲家に誘き寄せられたのだと回竜は悟ったのです。



葛飾北斎『北斎漫画』より

原文テキスト

まずは一読してください。

“That traveling priest is not in the house;—he is gone! But that is not the worst of the matter. He has taken the body of our *aruji*; and I do not know where he has put it.”

At this announcement the head of the *aruji*—distinctly visible in the moonlight—assumed a frightful aspect: its eyes opened monstrously; its hair stood up bristling; and its teeth gnashed. Then a cry burst from its lips; and—weeping tears of rage—it exclaimed:—

“Since my body has been moved, to rejoin it is not possible! Then I must die!... And all through the work of that priest! Before I die I will get at that priest!—I will tear him!—I will devour him!... And there he is—behind that tree!—hiding behind that tree! See him!—the fat coward!”...

In the same moment the head of the *aruji*, followed by the other four heads, sprang at Kwairyō. But the strong priest had already armed himself by plucking up a young tree; and with that tree he struck the heads as they came,—knocking them from him with tremendous blows. Four of them fled away. But the head of the *aruji*, though battered again and again, desperately continued to bound at the priest, and at last caught him by the left

英文の読解ガイド

① “That traveling priest is not in the house; / —he is gone! //
But that is not the worst of the **matter**. // He has taken the
body of our *aruji*; / and I do not know / where he has put
it.” //

体を持ち出されてしまった主人のろくろ首

棲家に戻ってきたろくろ首（主人／あるじ／*aruji*）に、仲間のろくろ首が、そこにいるはずの僧の姿が見えないことを報告します。「あの旅の僧が家にいない。—立ち去ってしまったんだ！（That traveling priest is not in the house; —he is gone!）」と仲間が言います。続けて仲間は「だが本当にまずいのはそこじゃないんだ（But that is not the worst of the matter）」と話の転換を図り、主人にとって衝撃的な事実を告げます。「奴は私たちの主人の体を持ち出してしまったんだ（He has taken the body of our *aruji*）」、おまけに、「私は奴がそれをどこに置いたのか見当もつかない（and I do not know where he has put it）」と報告するではありませんか。

英語としてはまず、he is gone における be gone の完了的なニュアンス（もういない、立ち去ってしまっている）も踏まえて読みます。また完了形つながりで、He has taken ... / he has put ... に見られる現在完了形は「すでに～してしまっている」という結果を示しています。それから I do not know の目的語として機能する where he has put it.（僧・回竜が「それ＝首無しの主人の体」を置いた場所）も把握しておきましょう。where SV で「S が V する場所」という間接疑問文（「疑問詞＋SV」という名詞節が別の文の一部として組み込まれた文）の役割を果たしています。

② At this announcement the head of the *aruji* / —**distinctly**
visible in the moonlight / —**assumed** a frightful aspect: /
its eyes opened monstrously; / its hair stood up **bristling**; /
and its teeth **gnashed**. // Then a cry burst from its lips; /
and—weeping tears of rage / —it **exclaimed**:— /

月下に映える、ろくろ首の激怒

ろくろ首の怒りに燃える様子を歯切れ良く畳み掛ける描写が力強く読ませます。この宣言を受けた主人の生首（At this announcement the head of the *aruji*）がどのように目に映るのかといえば、月下にて際立って目に見え（distinctly visible in the moonlight）、それは恐るべき様相を呈します（assumed a frightful aspect）。ここでの assume は「（様相を）帯びる、呈する」です。そのまなこは怪物じみた様子で見開かれ（its eyes opened monstrously）、その頭髪は逆立つようにざわざわと立ち上がり（its hair stood up bristling）、ギリギリと歯ぎしりをしています（and its teeth gnashed）。gnash は「歯ぎしりをする」という怒りを表現する動作が鮮烈です（なお発音は /næʃ/ で、g は発音しません）。そうして雄叫びが唇からほとばしり（Then a cry burst from its lips）、怒りの涙を流しつつ（weeping tears of rage）、ついに後述（③）のような言葉を発するに至るのです（it exclaimed）。月下の怪しさも含め、状況のおどろおどろしさは筆舌に尽くし難いものがあります。英文として味わい深いのは、ダッシュ、セミコロン、そしてコロンを使うことで、情報が次々と付け加えられ、動作が連続して迫ってくるような異様な効果が生じている点です。ダッシュは挿入的に情報を加え、セミコロンは等位の動作を並列し、コロンはこれから起こることを強く導く働きをしています。次の本文例はどれも情報の付け足しとともに、それに伴う異様な状況の提示を示しています。

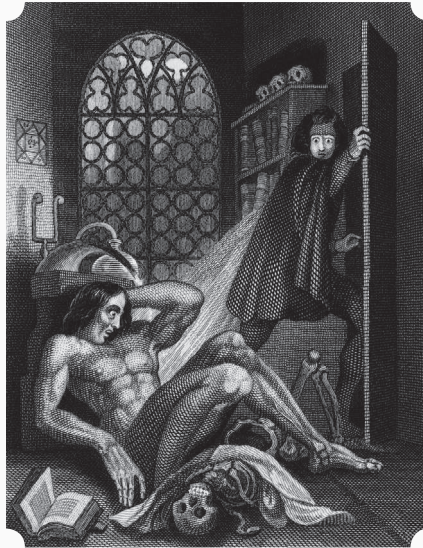


Chapter

3

『フランケンシュタイン』

Frankenstein



フランケンシュタイン

『フランケンシュタイン』の アクチュアリティ

メアリー・シェリー (Mary Shelley, 1797–1851) は20歳前後という若さで英文学史上で最も有名な怪物が登場する『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』(*Frankenstein: or The Modern Prometheus*, 1818) を書き上げました。ゴシック小説として読まれることも多い本作は、その源流の深さと現代における応用範囲の広さを誇る小説です。科学のタブーや人造人間の創造といった科学論的テーマには、今日の人工知能 (AI) やバイオテクノロジーの議論にもつながる問題意識がすでに提示されています。

また宗教的観点から見れば、人間 (被造物) と神 (創造主) の関係という古典的な問いも物語の根底にあります。教育論の観点では、人格形成を巡って「生まれつきの性質 (nature)」と「養育や環境 (nurture)」の一体どちらが決定的なのかという問題も重要なテーマとして炙り出されます。このように広い思想的射程を持つ点を見ても、『フランケンシュタイン』が後世の文学やポップカルチャーに強い影響を与えてきたことに納得がいきます。なお、抑えきれない情熱のすえに人造人間を造り上げてしまうヴィクター・フランケンシュタインのマッドサイエンティスト気質に関しては、作品が生まれた背景に感情や想像力、自然への感受性を重視したロマン派の時代 (The Romantic Period, 18世紀末～19世紀前半) の思想的空気があった点も指摘できるでしょう。



メアリー・シェリー (1797 – 1851)

「フランケンシュタイン」は誰の 名前? — 誤解が生み出す新たな 読み

『フランケンシュタイン』を語る上で欠かせない事実として、「フランケンシュタイン」という名が作中に登場する怪物の名前だと勘違いされているという点が挙げられます。もちろん、フランケンシュタインとはその怪物を生み出したヴィクター・フランケンシュタインの名前です。しかし「怪物の名前がフランケンシュタイン」だという思い込み、この誤解は日本に限らず広く浸透しているようです。小説を読んでいない人でも、フランケンシュタインは「人造の怪物が人間に災いをもたらす話」だという程度には知っています。その怪物のイメージは、ジェームズ・ホエール監督による映画 (1931) でボリス・カーロフが演じた怪物像に大きく影響されているようです。この映画のビジュアルが定着したというのもそうですが、それ以上に重要なのは、この映画ポスターに「フランケンシュタイン」という不気味な文字が大きく記された下に怪物が描かれているという点です。このイメージは名前と怪物のビジュアルを重ねてしまい、その結果として西洋でも「怪物の名がフランケンシュタインだ」と誤解する人が増えてしまったのでしょう。

とはいえ『フランケンシュタイン』を巡るこの誤解は、単に広く浸透しているというだけではなく、作品のテーマを考える上で興味深い論点を提供しています。というのも、小説の中心モチーフは、ヴィクター・フランケンシュタインと、名前すら与えられなかった怪物との関係にあります。怪物はフランケンシュタインに忌み嫌われ、名前を持たないことが、親の愛情の欠如を象徴する仕掛けになっています。そう考えると、



1931年映画版のフランケンシュタインの怪物 (演: ボリス・カーロフ)

本来名前がないはずの怪物に「フランケンシュタイン」という名前が与えられてしまうという誤解自体が、物語のテーマを皮肉にも拡張していると言えるのです。つまり、作品の中で孤独な存在として扱われた怪物は、現実世界の誤解を通じて、逆に名前を得るという矛盾を生んでいるのです（この場合、「フランケンシュタイン」という名前の響きや意味ではなく、観客の誤解によって「名前が与えられた」という現象の方が重要だ、という見方です）。

さらに言えば、『フランケンシュタイン』の物語には、フランケンシュタインと怪物の間にある種の二重性が存在します。フランケンシュタインは自らの過ちを自覚した際に、怪物を捨て去り、逃亡します。さらに、怪物が引き起こした事件で他者が疑われた際にも、自分の恐ろしい行為が明るみに出るのを恐れ、証言を拒むという倫理的に問題のある行動をとります。ここで浮かび上がるのは、「怪物とは誰なのか？」というテーマです。表向きは、フランケンシュタインに創られた怪物が「怪物」とされていますが、実は彼自身が怪物なのではないかという見方も成り立ちます。つまり、どちらが真の怪物なのかわからなくなるという、寓意的かつ教訓的なテーマが作品に込められているのです。実際、ギレルモ・デル・トロ監督による最新の映画版『フランケンシュタイン』（2025）では、とある人物が終盤にてフランケンシュタインに向かって「あなたこそが怪物だ」と言い放ちます。このセリフは原作には存在しませんが、デル・トロ監督が脚本を練る際、フランケンシュタインと怪物の二重性を深く理解し、意識していたことがうかがえます。

Frankenstein (1818, 1831) - Vol.1

原文テキスト

まずは一読してください。

Remember, I am not recording the vision of a madman. The sun does not more certainly shine in the heavens than that which I now affirm is true. Some miracle might have produced it, yet the stages of the discovery were distinct and probable. After days and nights of incredible labour and fatigue, I succeeded in discovering the cause of generation and life; nay, more, I became myself capable of bestowing animation upon lifeless matter.

怪談単語トレーニング

単語がわかりづらかった場合はここで準備を。

単語	品詞	日本語	例文
affirm (əf'ɜ:m)	動	～を主張する	The master affirmed that the experiment should be banned as soon as possible. (その実験は一刻も早く禁止すべきだと師匠は断言した。)
yet (jet)	接	しかし、それにもかかわらず	Many opposed his decision, yet he refused to change his mind. (多くが彼の決断に反対したが、それでも彼は考えを変えようとしなかった。)
distinct (distɪŋ(k)t)	形	他とまったく別な、別個の	Her gift for sensing supernatural beings is distinct from that of other exorcists. (怪異を察知する彼女の力は、他の退魔士たちとは一線を画している。)

② The sun does **not more** certainly **shine** / in the heavens / **than** [that which (=what)] I now affirm is true.

～ほど確かなことはない（比較による強調）：not more ... than ～

The sun does not more certainly shine は「太陽がより確かに輝くことはない」という否定文です。ここでは not が more certainly を否定していると読んでください。つまり「太陽が天に輝くことよりも確かなことはない」と言っているわけです。では、その比較の対象は何でしょうか。それが than 以下で示されています。

関係代名詞 that which SV は関係代名詞 what SV に該当

that which は文語的な表現で、現代英語では what に相当します。関係代名詞 what は what SV というまとまりを作り、「SがVすること／もの」という意味になります。この文では that which (=what) I now affirm が that which (=what) SV に当たり、それが true であると述べられています。

[that which I now affirm] is true

[私が今や主張することは]真実である

これを上の not more ... than ～ と合わせて読むと、「私が今主張していることが真実であるということほど確かなものはない」という意味になります。「太陽が天に輝く」という誰も疑えない事実を持ち出すことで、語り手であるフランケンシュタインは、自分の語る内容がそれと同じくらい確かなものだとして強く断言しているのです。

The sun does not more certainly shine

太陽がより確かに輝くことはない

in the heavens

天において

than that which I now affirm is true.

私が今主張することが真実であるほどには。

「私が今や主張することが真実であるということほど確かなものはない。それは、太陽が天に輝くのと同じくらい確かなことなのだ。」

③ Some miracle might have produced it, / **yet** the stages of the **discovery** were distinct and **probable**.

過去の出来事への推量：might have p.p.

might は may に近い意味（～かもしれない）を持ちますが、may よりもやや控えめな推量を表すことがあります。そして may have p.p. / might have p.p. の形になると、過去の出来事について「～だったかもしれない」と述べることができます。

Some miracle might have produced it

「何らかの奇跡がそれを生み出したのかもしれない」

ここで気になるのは it（それ）が何を指すのかです。この話し手であるフランケンシュタインは、科学技術を用いて新たな人間を作り出した人物です。つまりここで語られている it は、その創造の出来事を指していると理解できます。

逆説の yet : SV, yet SV

yet といえば、完了形とともに使われる「まだ／未だ」という意味で覚えている人も多いでしょう。例えば

✧ メアリー・シェリーが生きた19世紀初頭

シェリーが生きた19世紀初頭（ロマン主義の時代）のイギリスでは、西欧、アフリカ、米大陸を結ぶ三角貿易の一辺を成す奴隷貿易が行われていました。16世紀にアメリカを植民地化したイギリスは1750年頃には米大陸への奴隷貿易を手中に納め、「奴隷貿易禁止法」が可決される1807年までに300万人もの奴隷を移送したことがわかっています。18世紀における白人中心主義的な人種観は次第に強固になり、比較解剖学者ヨハン・ブルームバッハ（独；Johann Friedrich Blumenbach, 1752–1840）の人種選別も西洋に影響を与えていました。それは、キリスト教の神を持つ西洋人こそが人類の起源に最も近く、それ以外は変種だとする偏見です。頭蓋骨の特徴によって「美しい均整の取れた」白人とそうでないアフリカ人を分ける骨相学（現代からすると疑似科学）がよく知られているのもこの時代です。

怪物が「おどろおどろしく」描かれるのも、西洋白人視点からのレイシズムが読み取れます。18–19世紀の植民地政策は、当時の英国人たちの人種観を次第に変容させ、文明と非文明の二項対立が強くインプットされ、18世紀後半には「皮膚の色」が「人種」の識別に機能するようになっていたからです。

しかし、歴史は変わります。1791年にはウィリアム・ウィルバーフォースが下院で奴隷貿易廃止を訴えたように、皮膚の色による人種差別、奴隷売買に反対する流れが確かに生まれてきていたのです。そうした思想を支持する知識人の中には、メアリーの父、ウィリアム・ゴドウィンもいました。メアリーもまた父の影響のもと、怪物を描くことでレイシズムへの懐疑を読者と共有したかったのかもしれません。ちなみに、怪物への人種的投影は、復讐に燃え反乱を起こす黒人像だとする見方もあります。メアリー・シェリーが誕生してから『フランケンシュタイン』出版に至るまでの期間（1797–1818）は、奴隷貿易や砂糖交易の解体期とピタリと符合し

ています。（詳しくは小川公代『ケアの物語 フランケンシュタインからはじめる』pp.133-138を参照のこと）。言われてみれば、スティーヴン・スピルバーグ監督作『アミスタッド』（1997）は、キューバ沿岸、スペイン籍の商船ラ・アミスタッド号で起こった船内のアフリカ人奴隷の反乱を描いていましたが、この事件が起こったのも『フランケンシュタイン』出版から21年経った1839年のことでした。

✧ 「フランケンシュタイン・コンプレックス」

『フランケンシュタイン』の影響を語る際によく用いられる概念の一つに、フランケンシュタイン・コンプレックス（Frankenstein Complex）があります。自己意識を持つ機械や人工生命体が暴走し人間に災厄をもたらすのではない、という不安や恐怖を指す言葉です。この用語はアメリカのSF作家アイザック・アシモフ（Isaac Asimov）によって提唱されたもので、初出は短編小説『迷子のロボット』（*Little Lost Robot*, 1947）とされています。人間が自ら創造したものがやがて制御できなくなるかもしれないという想像上の恐怖であり、『フランケンシュタイン』がすでに提示した問題の現代的な延長と見るができます。

この「人間の創造物が人間を脅かすかもしれない」という発想は、20世紀の歴史の中でも象徴的な形で現れました。ロバート・オッペンハイマー（J. Robert Oppenheimer, 1904–1967）による原子爆弾の開発です。彼が原爆開発を主導したマンハッタン計画を経て、アメリカ合衆国は日本の広島（8月6日）と長崎（8月9日）に原爆を投下。推定死者数は広島で約14万人、長崎で約7万4000人に上り、人類史上最悪の核使用例が歴史に刻まれます。オッペンハイマーはリアル・フランケンシュタインだったのです。オッペンハイマー博士の半生を描いたクリストファー・ノーラン監督作『オッペンハイマー』（Oppenheimer, 2023）がプロメテウス神話への言及から始まるのは偶然ではありません。『フランケンシュタイン』の副題が

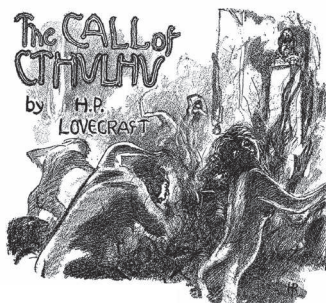


Chapter

5

『クトゥルーの呼び声』

The Call of Cthulhu



クトゥルーの呼び声

✧ ラヴクラフト『クトゥルーの呼び声』の重要性

アメリカ東海岸ロード・アイランド州生まれのハワード・フィリップス・ラヴクラフトはクトゥルーという邪神、およびその邪神を奉るクトゥルー教を創造した作家として今や広く知られています。ラヴクラフト作品の中で何をもってクトゥルー神話の原点とするかには議論もある一方、本作『クトゥルーの呼び声』(The Call of Cthulhu, 1928) は間違いなく重要な一作であり、クトゥルーの邪神／邪教／神話のアイディアを遺憾なく提示しています。クトゥルー神話の特徴を大枠で示すと次のようなものです。

1. 海の底に蠢く太古の邪神たちを祀る邪教がある。
2. 邪神たちは現世への復活を狙い、教団はその狙いのために暗躍している。
3. 邪神たちは海洋上の小島もしくは海底に古代都市ル・リエーを建て、そこに潜んでいる。
4. 邪神たちはしばしば地上に現れ、港町の住民に生贄を要求したりする。
5. 邪神たちは魚介類を組み合わせたような容姿をしており、一種には、頭は蛸、顔からは烏賊の触手を生やし、翼を生やした邪神もいるという。
6. 教団の合言葉は「ル・リエーの館にて、死せるクトゥルーは夢見て待つ」。

ラヴクラフトの小説内で語り手や報告者となる者は、たまたま入手した誰かの手記を読むなどして、好奇心に駆られて探求するうちに、以上

のような事態を見出していく展開が定番です。ホラー小説の古典『ドラキュラ』(Dracula, 1897) が複数の登場人物が残した手記や報告書によって構成されている点を踏まえると、本作もその路線にあるとわかります。ちなみに、ラヴクラフトに大きな影響を受けたであろうホラーの巨匠スティーブン・キングのデビュー作『キャリー』(Carrie, 1974) にも、とある惨劇を生き延びた人物が残した自伝や、惨劇を調査・研究した書籍からの抜粋が散りばめられていたり、同様の手法が見られます。映画界だとフェイク・ドキュメンタリー(モキュメンタリー)やファウンド・フッタージものと呼ばれるホラー・ジャンルへと繋がっていく系譜です。例えばアメリカ映画だと『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』(The Blair Witch Project, 1999) を皮切りにブームが始まり、2000年代以降の日本映画では白石晃士監督作品がこの分野でよく知られています。全体像ではなく断片的な情報が提示されるに留まり、それら複数の点を線にしてつなげていく擬似参加型の興奮(没入感)を読者／観客は獲得していくのです。複数の点をつなげて恐怖の像を勝手に心に描いてしまう人間の習性をホラー作家は知悉^{ちしつ}しており、この恐怖を掻き立てる手管にこそ彼らは異能を発揮するのでしょう。



ハワード・フィリップス・ラヴクラフト
(1890 - 1937)

『クトゥルーの呼び声』の語りの構造とあらすじ

『クトゥルーの呼び声』の構造に注目すれば、その語りに真実味を持たせ読者を引き込むための工夫が読み取れます。まず語り手である「私」(フランシス・ウェイランド・サーストン) が登場したのち、その語り手が発見した手記に視点が移ります。この手記における語り手は「私」の大叔父であるエインジェル教授です。そして視点は再び「私」に戻り、今

度は彼が見つけた新聞記事の語りへと視点が移り、そして記事に登場する航海士ヨハンセンの手記が読めます（ヨハンセンの語りにも切り替わる）。「私」が探求していく事柄が「教授が残した手記」、「新聞記事」、「航海士が書き残した手記」と、いかにも客観的で真実味のありそうな「証拠資料」によって裏付けられ、また理解が深まっていく仕組みとなっているのです。読者は「私」と共に、まるでルポルタージュを読んでいるような気持ちにさせられ、ともすれば荒唐無稽なクトゥルーの教団と悪霊の神々が現実存在するのではないかと思わされていくのです。あらすじを確認しましょう。

語り手である「私」は、古代碑文を専門とする大学教授の大叔父が原因不明の死を遂げた際、遺品整理に関わるのですが、それらの遺品の中に謎めいた箱を見つけます。箱を開けると中には粘土製のレリーフ（浅浮き彫り）と、支離滅裂な走り書き文書、新聞の切り抜きが入っていました。教授による走り書きには「クトゥルー教」という文字が読み取れます。小説はここから、語り手によって読まれる教授の手記という体裁を取るようになります。手記によれば、教授は彼を訪れたロード・アイランド美術学校で彫刻を学んでいる青年ウィルコックスからこのレリーフを受け取ったとのこと。青年は「昨夜、不思議な街々の夢を見ながら」無意識的にレリーフを制作したのですが、教授の考古学的知識からの見地をうかがいたいのだといいます。青年が夜毎に見る夢について毎日のように話を聞くと、まず巨大建造都市の光景があり、その地下からは「クトゥルー」や「ル・リエー」と、かろうじて聞き取れる謎めいた声が何度も聞こえるのだそうです。

教授がアメリカ考古学協会の年次大会に出席した際、ルグラスという名の警視正に声をかけられ、彼が持参したという「グロテスクで小さな、いやらしい、見たところ非常に古い小さな」石像を目にします。ニューオリンズで仕事に従事している警視正によれば、森に囲まれた沼地でヴードゥー教と思しき集団が儀式を取り締まった際に押収したものだとのことです。実際にはヴードゥー教ではなく、得体の知れない秘密の教団

だったらしく、この邪神像の考古学的な知見が得られれば邪教について深く知れるだろうという見込みがあったのでした。

調査を続ける語り手の「私」は、ニュージャージー州で鉱物学を研究する友人を尋ねた際、標本の保管棚にある石の下に惹かれたオーストラリアの古新聞を目にします。目に留まった記事に載っていた写真は果たして、かつてルグラス警視正が見つけた例の邪神像とほとんど同じものでした。それは孤島から生還した漂流船についての記事で、唯一の生存者である二等航海士ヨハンセンは由来のわからない恐ろしい石像を握りしめて生還したとのことでした。語り手はヨハンセンの妻を訪ね、生還したものの身も心もぼろぼろになって亡くなった夫の手記を手渡されます。その手記によれば、航海の末にたどり着いた屍の都市ル・リエーでヨハンセン達は膠状のヌメヌメした緑の怪物に襲われ、仲間が命を落とす中なんとか脱出して船を出しましたが、怪物は海を超えて追いかけてきました！

『クトゥルーの呼び声』の英語原文について

ラヴクラフトの英語は本人が19世紀の怪奇小説を読み漁っていた影響もあり、やや古風で持って回ったような文体です。深い味わいのある文体である一方、文法と語彙の面ではやや難易度が高く、無手勝流に挑めばやや五里霧中のような印象を受けるものです。その一方で、19世紀的でありながらラヴクラフトの現代性もまた顔をのぞかせる面白みに溢れており、そのハイブリッド的な英語を楽しんでもらうというのが一興です。

不気味な粘土板

第1部 *The Horror in Clay* (粘土版の恐怖) からの一節を読みましょう。語り手である「私」は、古代碑文の専門家である大叔父の遺品整理に関わる過程で、大叔父が鍵をかけて保管していた箱を見つけます。それを開けてみると、その中に謎めいた粘土製の浅浮き彫り (bas-relief) が入っていました。そのレリーフは現代に作られたように見えるものの、象形文字らしい文字と、なんらかの図像が刻まれています。この謎めいた図像の不気味さが語り手の困惑を引き起こします。ここでは粘土製のレリーフに描かれた図像 (a figure of evidently pictorial intent) を読み解いていきましょう。

原文テキスト

まずは一読してください。

Above these apparent hieroglyphics was a figure of evidently pictorial intent, though its impressionistic execution forbade a very clear idea of its nature. It seemed to be a sort of monster, or symbol representing a monster, of a form which only a diseased fancy could conceive. If I say that my somewhat extravagant imagination yielded simultaneous pictures of an octopus, a dragon, and a human caricature, I shall not be unfaithful to the spirit of the thing. A pulpy, tentacled head surmounted a grotesque and scaly body with rudimentary wings; but it was the general outline of the

whole which made it most shockingly frightful. Behind the figure was a vague suggestion of a Cyclopean architectural background.

The writing accompanying this oddity was, aside from a stack of press cuttings, in Professor Angell's most recent hand; and made no pretense to literary style. What seemed to be the main document was headed "CTHULHU CULT" in characters painstakingly printed to avoid the erroneous reading of a word so unheard-of.

怪談単語トレーニング

単語	品詞	日本語	例文
apparent (əpəˈrɛnt)	形	明らかな、見たところの	It was apparent that the believers were talking to something unseen. (信者達が何か目に見えないものと語っていたのは明らかだ。)
hieroglyphics (hɪəˈrɒɡlɪfɪks)	名	象形文字	If only I could understand Egyptian hieroglyphics, I could read the ancient Book of the Dead. (エジプトの象形文字が理解できたら古代の死者の書が読めるのになあ。)
evidently (ɛvɪdəntli)	副	明らかに	Now I see! She is evidently the serial killer! (よしわかった!殺人鬼の正体は明らかに彼女だ!)
pictorial (pɪktɔːriəl)	形	絵画的な、図の	The killer's notebook was filled with pictorial records of his crimes. (その殺人犯が犯行を記したノートには、犯行を絵で記録した資料がふんだんに残されていた。)
impressionistic (ɪmprɛʃənɪˈstɪk)	形	印象主義的な	Impressionistic paintings emphasize the effects of light and color rather than precise details. (印象主義的な絵画は細部の正確な描写よりも光と色彩の効果を重視する。)
execution (ɛksɪkjúːʃən)	名	(芸術作品における) 描き方、仕上げ方	The execution of Saturn Devouring His Son seems to embody Goya's madness. (『息子を食べるサトゥルヌス』の描き方にはゴヤの狂気が宿っている。)